

研究報告

書評

○当文学部関係教職員、本学年度刊行の著書を対象
尾形裕康博士著

『近代日本 千字文型教科書の研究』
における

——とくに「異系千字文型」

概念の成立をめぐる——

渡部 学

一
尾形裕康博士の、約四〇年にわたる、たゆむことなき追究の成果である、『千字文』研究の業績が、『近代日本における千字文型教科書の研究』と題して、今回早稲田大学出版部から刊行された。B5判・一、一〇〇余頁（四八、〇〇〇円）に及ぶ大著である。

われわれ後学の範とすべきこの大先達の、多年の研究結果の公刊を、心から慶祝する。

二

著者は、本書を大きく三部に分ち、その第一部を立論編とし、いわゆる「千字文型教科書」出現の、主として明治期の思潮的背景を概観し、その背景のもとに出現した千字文型教科書七三〇余種はもとより、その源流を形成し上げ来った古代以来江戸時代末期に至るまでの四八〇余種、合計一、二〇〇余種という膨大な数にのぼる同型教科書を仔細に検討して、これを「周系千字文」・「異系千字文」の二類型に分ち、とくに後者については、その内容構成つまりスコップ設定のとり方から、社会・歴史・地理・訓育・兵事・その他の六系に分つ

ている。千字文が異系千字文へと転移し、その異系性が近代教科の前駆をすでに顕現させていたことを、現物によって指摘している。興味深いのは、その「兵事系」異系千字文であって、そのこの近代教科編成において表面上はその姿をかくして行ったこの分野——言うまでもなく、この分野は、徴兵制を頂点とする戦前教育体制の中では、実質的にはむしろ強力に内在存続していたが——が露頭をあらわしていることである。

本書が、教育史書としてとくにぬきんで、単なる書誌学的収集を超えている特質は、この第一編の第三章「学校採択の千字文型教科書」にある。思うに、いかにすぐれたものであれ、ただその書物があったということだけでは、書誌学の研究対象とはなっても、教育史学の対象とはなり難い。教科書類の研究において、その所述内容の超越的妥当性のみ言及して能事終れりとするたぐいの研究も、世には時に散見されるが、とくに教育現実との整合的な妥当の側面、言わば内在的妥当性についての検討は、教育史学にあつては必須である。この点、著者は、藩校・郷校・私塾・寺子屋・義校・小学校・中学校・女学校・師範学校の各学校教育実態のもとでの、千字文型教科書採択使用の状況を、使用学校名・同学校所在地・教授年代・備考にわたって記述している。つまり、この型の教科書の、現実教育の中での具体的妥当性を解明し、これに一八〇頁もの分量をあてている。

本書の第二部は、近代主要異系千字文型教科書についての注解編である。

明治時代刊の同書五四種、大正時代のそれ七種、昭和時代のそれ七種、計六八種についての詳細な注解である。

これらのうち、日柳燕石の作とされる『皇国千字文』の如きは、本来儒教的文化地盤の上に結実した周興嗣次韻『千字文』が、その四文字韻文構成という形式的枠組には従いながらも、内容をまさに一八〇度転換し、文字通り完全な換骨奪胎をとげているのは、驚異に値する。田中内記作の『西洋千字文』そ

の他も同様である。識字用習字教科書として発達して来た周系千字文が、その識字の、時代に即しての撰者の教育目的に従って、自由に選択・排列され、全く別種のカリキュラムとして具体化されているのを見る時、明治・大正期における日本民族の教育エネルギーの、豊かな弾力性を思わせる。

本書の第三部は資料編であって、明治・大正・昭和期の周系千字文および異系千字文七百数十種について、その書名・著者・刊年月・刊行者・装丁・記述様式・備考を明記して年代順に掲げている。

三

以上は、本書の内容的構成を概観し紹介したのであるが、管見ながら、本書成立の意義について若干の考察を試みたい。

本書中には、筆者のささやかな追究をも引いて頂いているが、朝鮮の李朝末期の実学思想家五洲李圭景（一七八八〜？）は、「小学」を、本来は、初学者の書字の学であつたものが、のち大人の字学となり、さらに朱子によって古今嘉言善行集の書すなわち「紫陽小学」となつて、これが一般に「小学」とされるようになった。しかし、小学成立の初相に立ち帰つてこれを考えれば、それは書字の学なのであるから、「千字文・類合・訓蒙字会」などの識字の書は、これを「小学類」とすべきであるとし、「小学」には、「紫陽小学」と「小学類」との二つがあるとして、「小学古今二学」説を唱えている（『五洲衍文長箋散稿下』六五六頁以下）。

李圭景のこの初学入門教科書分類概念は、知識の道具としての文字学習書たる「小学類」と、封建秩序のための倫理道德的内容知を習得する書としての「紫陽小学」とを分けたものであつて、習得知そのものの性質をアイソレートして区別を立てたものである。

そこには、学習者の学習過程、とくにその生きた総合的学習活動については

捨象がみられる。

尾形博士の本書は、五洲李圭景が「小学類」として一様に設定した識字教科書の一つである『千字文』を、周系と異系とに分つてゐるが、その何れも、それは単なる識字のための教科書であるいは習字手本たるにとどまるものではなく、韻を踏んだ連句によつて、徳育はもとより一般的知識を授け、さらに思想、芸術性涵養にまで役割りを果たした「習字即学問」の書であるとされている。そこから、その学問について、「日常性」・「心理性」の原理を加えることが、時代の変遷につれて必然的に生じて来、当然そこに「異系千字文」が成立して来た——そういう事実を美事に解明されたのである。異系千字文は、かくて、単なる道具学習書ではなく、学習者をめぐる時代的要請（広義の日常性）や直接的な生活日常性、さらには道徳・芸術性、学習者の心理性の諸原理も加味された総合教科書であつたことが明らかにされている。習字手本とされたことも、手と目と頭の連合、もっと言えば労作と結合した学習の書ということであつて、そういう意味では、まさに機能的な総合教科書であつたと言ひ得る。

従つて、明治前半期に盛行をみた異系千字文は、学制の整備に伴う教育内容の分化、すなわち近代的教科編成の確立するに伴つて、その中に分化吸収されて行き、やがて千字文型教科書の衰退を結果することになるのである。

このような前近代から近代にかけての、教育内容編成の歴史的必然的な歩みが、千字文型教科書の歩みをたどることによつて、実証的に解明されてくる。

四

最後に、著者尾形博士の御下命により、筆者が現地調査をとげた、韓国の忠清北道報恩郡懷北面（旧懷仁界）の旧韓末在郷儒学者朴文鎔（号壺山、一八四六〜一九一八）は、その文集『壺山集』巻七十一「雜識内篇二」の「論字」の中で、『千字文』が「常に苟簡、湊合破碎し、文を成すに字従順せず、義連属

せず、決して小児に教ゆべからず。余は則ち朴世茂『童蒙先習』をとる。初学
に教ゆるに千字文より勝れり」としている（日本の明治初葉小学校を例示する
と、『千字文』は入学直後でなく、若干進級してから教授していた。二二三〜
二三八ページ）。韓国では、『耶蘇三字経』のような言わば異系三字経は、板行
されたが、千字文についてはその權威を犯すことを恐れてか、異系千字文の発
達をあまりみなかった。しかし、丁若鏞の『児学篇』（これはむしろ『類合』の
発展形態）もあり、筆者蔵本中には『漢日鮮作文千字 全』（大正十二年一月、
京城）もある。この後者は、千字文の、文字の選択・排列はこれを全面的に変
え、より日常生活に近づけるよう編成すると共に、朝鮮語の音・訓とともに日
本語の音・訓を付して、日韓作文力の基礎養成を期している。まさに植民地朝
鮮版異系千字文である。尾形博士（国士館大学教学顧問、アジア文化総合研究
所理事長兼所長）の御示教の線にも沿いつつ、今後この分野にも鋳を入れた
と考えている。

以上

（武蔵大学人文学部教授・東洋教育史）